



The Iron Materials in Pyonjin and Kaya

東 潮

①弁辰の鉄と南北市羅

②斧状鉄板の生産と流通

③鉄鋌の生産と流通

④铸造斧形品の生産と流通

⑤倭と加耶の鉄をめぐって



『三国志』魏書東夷伝弁辰条の「国出鉄韓瀛倭皆從取之諸市買皆用鉄如中国用錢又以供給二郡」、同倭人条の「南北市羅」の記事について、対馬・壱岐の倭人は、コメを売買し、鉄を市（取）つていたと解釈した。斧状鉄板や鉄鋌は鉄素材で、5世紀末に列島内で鉄生産がはじまるまで、倭はそれらの鉄素材を弁辰や加耶から国際的な交易によってえていた。鉄鋌および铸造斧形品の型式学的編年と分布論から、それらは洛東江流域の加耶諸国や栄山江流域の慕韓から流入したものであった。5世紀末ごろ倭に移転されたとみられる製鉄技術は、慶尚北道慶州陰城洞や忠清北道鎮川石帳里製鉄遺跡の発掘によってあきらかとなった。その関連で、大阪府大畠遺跡の年代、フイゴ羽口の形態、鉄滓の出土量などを再検討すべきことを提唱した。铸造斧形品は農具（鍬・耒）で、形態の比較から、列島内のものは洛東江下流域から供給されたと推定した。倭と加耶の間において、鉄（鉄鋌）は交易という経済的な関係によって流通した。広開土王碑文などの検討もふまえ、加耶と倭をめぐる歴史環境のなかで、支配、侵略、戦争といった政治的交通関係はなかった。鉄をめぐる掠奪史観というべき論を批判した。